



芸能

聖徳太子の精神に触れる新作能

没後1400年 叡福寺で5月9日上演

「十七条憲法」を制定するなど、日本という国の礎を築いたとされる聖徳太子（574～622年）が亡くなって今年で1400年。コロナ禍などで混乱する現代社会に、改めて太子の精神に触れようという新作能「聖徳太子」が作られ、5月9日、太子の御廟所のある大阪府太子町の磯長山叡福寺（野外特設会場）で上演される。「疫病で亡くなったといわれる聖徳太子の人間としての面と、憲法を制定した太子の政治家としての毅然とした面の両方を表現できれば」と、演出、主演を勤める観世流シテ方の人間国宝、大槻文蔵は話す。（亀岡典子）

聖徳太子は飛鳥時代の皇族で、新作能「聖徳太子」を上る政治家。十七条憲法や冠位十二階を制定、遣隋使派遣に関わるなど多くの功績を残した。

今年は没後1400年の御遠忌。太子と、生母の穴穂部間人皇女、妃の膳部大郎女の3人がともに埋葬されたという叡福寺では、4月から約1カ月にわたって大法会を行い、その一環として大法会を行い、その一環として



新作能「聖徳太子」で、主人公の太子にふんずる大槻文蔵（撮影・後藤鐵郎）

「したい」と語る。物語の舞台は、平安時代中期の初夏、河内磯長の里。丹後の国で医学を学ぶ青年（福王知登）が、いにしへの都のあたりを巡る途中、磯長の里に立ち寄る。里の人（野村太一郎）に尋ねると、ここは、聖徳太子とその母、妃の3人を祀る「三骨一廟」であると教えられる。

青年は3人の死因が疫病によるものと知る。やがて青年のもとに、太子（大槻文蔵）とその母（大槻裕一）、妃（上野雄介）の3人が現れる。太子は、憲法を制定した理由などを語り、「わたしは疫病でこの世を去ったが、魂はいまも生き続けている」と言っておいていく。それは青年の見た夢であった。



新作能「聖徳太子」のスタッフと出演者。左から大槻裕一、プロデューサーの安田貞雄、大槻文蔵、竹田真砂子、近藤本龍＝大阪府中央区

竹田は「コロナの感染拡大と同時に、今回の新作能の脚本の依頼を受けた。太子が疫病で亡くなっていることから、現代のコロナ禍と、どこか思いが重なる展開になった」と話す。

叡福寺の近藤本龍住職は、「聖徳太子の教えが薄れてきているように思われるいま、能を通して太子によみがえっていただき、『和をもつて貴しとなす』に象徴される精神を、今一度広く知っていただきたい」と話している。

当日は、野村高齋による狂言「太子手鉾」も上演される。午後5時半開演。雨天決行。寄進者（2万円）を招待。詳しくは叡福寺（0721・988・0019）か同寺のホームページ。

文化

新作能「聖徳太子」を演じる
大槻文蔵さん(左)、作者の
竹田真砂子さん(大阪市中
央区、大槻能楽堂)



2021年が聖徳太子(574~622年)の没後1400年目となるのを記念し、新作能「聖徳太子」が作られた。太子が疫病で亡くなったとされるのをコロナ禍と重ね、医道を学ぶ青年の成長物語に仕立てた。関係者は「1400年前も今も人間が疫病に苦しむのは同じ。太子の功績に触れながら、医療関係者への応援も込めた」と語る。(金井恒幸)

没後1400年 聖徳太子の新作能

5月に大阪・太子町で披露



太子の衣装を着けた大槻文蔵さん
(撮影・後藤鐵郎)

平安時代中期。丹後の国で医学の道を志す青年が修養のため叡福寺がある河内・磯長の里を訪れる。そこで疫病で亡くなったとされる太子、その母、妃の墓を見つけ、それぞれの霊と出会う。太子の霊

も担う。

疫病との闘い、コロナに重ね

太子と母・穴穂部間人皇女と妃の膳部大郎女の墓がある叡福寺(大阪府太子町)が創作を委嘱。同寺では没後1400年目記念の奉納行事(4月10日~5月11日)の一環として5月9日、新作能と狂言「太子手録」(出演・野村萬斎)を披露する。新作能の作者は赤穂義士が題材の小説「白春」で知られる作家の竹田真砂子さん。観世流能楽師で人間国宝の大槻文蔵さんが太子を演じるほか演出なども担う。

「仏法を敬い礼節をわきまえて他国と対等に付き合おうために『十七条憲法』を作った」と告げ、「疫病のため世を去ったが、魂は生き続けている」と語る。

それらはすべて青年が見た夢。だが青年は太子の偉大さに触れ、自身もさらに修行を

積んで万人に尽くせる医師に成長したいと、決意を新たにする。

竹田さんは「疫病との闘いだった太子の生涯がコロナ禍の今と重なり、新作の主軸に据えた。十七条憲法は統治者の心構えとして現代でも通じる」と説明。大槻さんは「太子の豊かな人間性も表現したい」と話す。

能・狂言とも寄進者を招待。公演の様子は撮影し、活用を検討する。

芸能

聖徳太子ゆかり 大阪・叡福寺で新作能

劇場の ピクニック

聖徳太子という思い浮かぶのは、太子が創建にかかわったとされる奈良の法隆寺と大阪の四天王寺。だが大阪には、ゆかりの深い寺が他にもある。大阪府南河内郡の「叡福寺」。ここには太子と、生母の穴穂部間人皇女、妃の膳部大郎女が合葬されたといわれる円墳がある。5月9日、同寺で新作能「聖徳太子」が上演される。

聖徳太子は飛鳥時代の皇族であり、政治家。仏教を取り入れ、巨下を12の等級に分けて登用をはかる「冠位十二階」や、官位や貴族の規範を示す「十七条の憲法」を定めたとされる。622年没で、今年が1400回忌。各地で法要

1400回忌 今も響く人間性

や関連行事が行われるようだ。新作能も、叡福寺の「二四〇〇年御遠忌大法会」で奉納される。作は、時代小説や舞台の台本を多く手掛ける作家の竹田真砂子。監修・演出・節付を担当し、太子を舞うのは、シテ方観世流の人間国宝、大槻文蔵。

展開はこうだ。医道を学ぶ青年が、聖徳太子とその母、妃の御廟を訪れる。旅の疲れでうたた寝すると、夢に太子の母、妃が現れ、太子も姿を現して「私は疫病によりこの世を去ったが、魂は今も生き続けている」と語る。財力や武力を頼まず、礼節を持って他国と等しく付き合う国を目指した太子の志を知った青年は、万人に尽くせる医師になろうと決意する。

聖徳太子と母、妃は、ほぼ同時期に没しており、死因を疫病とみる説がある。多様な伝説、学説のある太子だが、確かに当時は、疫病との闘いの時代でもあっただろう。文蔵は「太子の人間性と、皇太子としての姿を出したい」と話す。今回は寄進者への招待公演(詳しくは叡福寺 <https://eifukuji-taishi.jp/>)だが、コロナ禍の今にも響く内容は、息長い生命を獲得する可能性を秘めている。



新作能「聖徳太子」の太子(大槻文蔵)
|| 後藤謙郎さん撮影

学芸部専門編集委員・畑律江
|| 第1・3木曜掲載

(第3種郵便物認可)

2021年(令和3年)4月23日(金曜日)

夕刊 読売新聞

かんさい

太子の教え 新作能に込め



新作能「聖徳太子」で大槻文蔵が
勤める太子(後藤鉄郎氏撮影)

太子は推古天皇の皇太子として、冠位十二階や十七条憲法を定め、遣隋使を派遣するなど内政・外交に活躍。大阪・四天王寺や奈良・法隆寺を建立し、仏教興隆に尽力した。妃が亡くなった翌日に逝去し、2か月前に他界した太子の母と3人一緒に葬られたと伝わる。

1400年御遠忌 来月奉納

竹田は「コロナ禍で奮闘する医療従事者を応援する気持ちを盛りこんだ」と明かす。「日本を国家として確立し、国際社会

観世流能楽師の人間国宝、大槻文蔵が5月9日、聖徳太子(574-622年)の1400年御遠忌に合わせ、太子の墓がある観福寺(大阪府太子町)で新作能「聖徳太子」を奉納する。「太子が説いた『和』の心を尊ぶ思いを込めている。後世に残る作品にしたい」と意気込む。(林華代)



新作能で太子を勤める大槻文蔵(左)と、原作者の竹田

大槻文蔵「後世残る作品に」

太子は古くから芸能に登場してきた。能楽研究者の天野文雄・京都芸術大学舞台芸術研究センター所長によると、室町時代以降、太子が参戦した仏教受容を巡る争いを描いた能「守屋」・四天王寺を舞台にした能「上宮太子」などが作られてきたという。

1943年には、太子が主人公の新作能「夢殿」が初演された。2008年に哲学者の梅原猛が原作を手がけた新作能「河勝」では、太子の霊と重臣・秦河勝の怨霊が登場する。今も太子は多くの人に親しまれている。

今作は、観福寺で5月11日まで営まれる御遠忌法要の奉納行事の締めくくりとして上演するにあたって、太子が母、妃と共に葬られたとされる墓に焦点をあてた。能は寺社が舞台の作品も多く、天野所長は「いわば当地ソング。能を通して太子の歴史に触れることは意義深い」と指摘する。

能のルーツである猿楽は、太子が河勝に命じて作らせた芸能が始まりとの伝承もある。文蔵は「一人の心を和らげる芸能を広めた太子の思いは、今も能とながっている。疫病で亡くなられたとされる家族の話もあり、現代にも共感が得られるはず」と期待する。

奉納の観覧申し込みは終了。映像の公開や太子ゆかりの地の上演を検討中。

